

—レター—

当ラボにおけるARTの安全管理, 品質管理上の工夫 Security Management and Quality Control at Our ART Laboratory

金井 裕子¹

Yuko Kanai¹

¹梅ヶ丘産婦人科 〒154-0022 世田谷区

¹Umegaoka Women's Hospital, 1-33-3 Umegaoka, Setagaya-ku, Tokyo 154-0022, Japan

建物の構造上の安全管理

当院ではART開始当時は1F手術室奥にある小さな培養室で全てをまかなっておりました。しかし年々症例数が増え、次第に培養室が手狭になりましたが建物の構造上、部屋自体を拡張する事はできませんでした。

そこで、今までの培養室を採卵・胚移植時の一時的な胚の保管や培養液などの調製を行うサブ培養室とし、胚の培養・ICSI・凍結など主な操作を行うメイン培養室は3Fへと、培養室を2フロアに分けざるをえなくなりました。

この2つの培養室間の移動は患者やスタッフも使うエレベーターを利用します。採卵から受精確認までは5 mlのポリスチレン ラウンドチューブ (FALCON2003) で培養しておりますので、密栓してしまえば万が一落としたりしてもチューブが割れる、卵が紛失するなどの心配はないのですが、移植用の胚を運ぶとなるとディッシュになります。

以前はディッシュを手で持ち、エレベーターに人が乗ってこない時間を見計らい細心の注意を払って運んでおりました。幸いにも人とぶつかる、ディッシュを落としてしまうなどのトラブルは全くなかったのですが、3年前のJISARTの審査をきっかけに、アステックのラック式インキュベーター (AR-1200A) のラックをワゴンに乗せてアルミホイルを被せ遮光して運ぶというスタイルに変えました (図1)。ラックは本体から取り出しても温度やpHがしばらくの間安定していますので、安全にかつ安心して運ぶ事ができます。また移動時だけガスを通すので混合ガスもかなり長持ちし経済的でもあります。

採卵室と培養室が離れている施設の方はご検討されては如何でしょうか。

少人数ラボとしての工夫

ラボの状態としては、メイン培養士3人と新人2人という少人数で年間採卵650周期、凍結胚移植400周期程度をこなしており、効率よくキッチリと作業を行うことを心がけています。

採卵からインセミまで、受精確認と胚の観察など各操作で担当を決めている施設も多いと思いますが、当院では患者担当制にしております。IVF担当・ICSI担当・凍結融解担当・AIH担当と一日の仕事を分け、採卵を行った者が最後まで責任を持ってその患者の胚を培養する事で全胚凍結や胚盤胞培養など個々の患者へ行う操作を確実に把握し、ラボ間での培養に関する申し送りは担当者の休前日のみと必要最小限で済ませています。

精子調整、媒精、培養ディッシュの交換など検体を他の容器に移す際には必ずダブルチェックを行います。8時半の採卵から3時の移植まではダブルチェックの回数がかかり多く、休憩に入ってチェックの相手がいなくなるなどの問題を避けるために30分の時差通勤と短時間休憩で早上がりの



図1 移送時のインキュベーターの様子

(受付 2009年6月30日/受理 2009年7月13日)

別刷請求先: 〒154-0022 世田谷区梅ヶ丘1-33-3

梅ヶ丘産婦人科

e-mail: taketoein@yahoo.co.jp